

# 尖石遺跡

——保存整備事業に係る試掘調査報告書——

1992

茅野市教育委員会

# 尖石遺跡

——保存整備事業に係る試掘調査報告書——

1992

茅野市教育委員会

## 序 文

茅野市には300を越える遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の方々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで、茅野市は、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく、昭和62年度から国・県当局のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成2年度からは引き続き保存整備事業に着手しました。

昨年から行っている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成して行く上での基礎的な調査として実施されたものであります。今年はその試掘調査も2年目を迎え、これまで調査の及んでいない地区から新たに幾つかの住居址が発見されるなど、大きな成果を得ることが出来ました。

また、この事業と平行して尖石整備委員会も設置され、史跡公園化に向けての準備も着々と進んでおります。今後も史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、みなさまの一層の御協力をお願い致します。

最後に、事業の実施にあたって、御指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者のみなさまに対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成4年3月

茅野市長

あゆえ也

## 例　　言

1. 本書は、特別史跡尖石遺跡保存整備事業に係る試掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成3年8月22日から9月6日まで行った。
4. 発掘現場における記録及び遺物整理は、調査員 小林深志、小池岳史、調査補助員 武居八千代、占部美恵が行い、伊藤千代美が補助した。
5. 出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で保管している。
6. 本書の原稿は、小池岳史と小林深志が協議し、小林が執筆した。この他、調査及び整理にあたって、茅野市文化財調査室の調査員に、助言を得た。
7. 「調査に至るまでの経過」と「遺跡の位置と環境」については前年度と重複するため割愛した。
8. 茅野市文化財調査室  
室長 長田 篤  
係長 鶴飼幸雄  
主任 両角一夫  
調査員 守矢昌文、小林深志、功刀 司、小池岳史、伊東みゆき、百瀬一郎
9. 発掘参加者  
武居八千代、占部美恵、牛山市弥、牛山徳博、堀内 潭、牛山静子、伊藤千代美、赤堀彰子
10. 整理参加者  
白旗スエ子、日黒恵子、長田ツギ、矢野聰美、金子清春、小平長茂、杉本裕子

## 第Ⅰ章 調査の目的

昨年度の調査では、国特別史跡尖石遺跡指定地の西側境界付近での遺構の分布状態を調査し、遺跡の西端を明らかにすることを主目的とした。また、かつての調査において、宮坂英式氏が第18号住居址が尖石遺跡の西端であるという見解を示したが、それを裏付ける結果を得ることも調査の課題とした。

その結果、所在のはっきりしていなかった第18号住居址の位置を明確に出来た他、宮坂英式氏の指摘したとおり、第18号住居址より西側に遺構は検出されず、遺跡の西端を明らかにする目的も達成することが出来た。

今年度の調査では、引き続き遺跡の北西の限界を知ることを目的として行った。この地区については過去において調査をしたことのない箇所であり、遺跡の範囲を確定する目的の他に、尖石遺跡の集落構造をみるうえにも、重要な地域と考えられた。また、遺跡の広がりが指定範囲内で終わっているのかどうかを確認することも目的の一つとした。

なお、来年度は遺跡の東端を見極める調査を予定している。

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

昨年度の調査を行う際に、尖石遺跡全体を大きく4つに分け、北西隅をI区とし、時計回りにII区III区IV区と区画の名称をつけた。その各区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きく10m四方の大きな正方形のグリッドで区切り(大グリッド)、X軸を大文字のアルファベット、Y軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを2m四方の小さなグリッド(小グリッド)としてX軸を小文字のアルファベット、Y軸を数字で表し、A1a1のように小グリッドの1つ1つに名前を付ける作業を行ってある。

今回調査の対象となったのは、遺跡の北西部にあたる、I区とその東に隣接するII区の一部である。今回の調査では、遺跡の北西端を確認することを目的としたため、指定範囲の北西から順に調査を進めた。

掘り下げにあたっては、住居址の検出が行えるよう、2mの小グリッドを1つおきに掘り下げて行く方法を取った。また、遺跡全体の地形を見るために、計画的に東西方向及び南北方向に一列に掘り下げて行くこととし、必要に応じて新しく調査区を設けることとした。

## 第2節 調査の経過

調査は8月22日から行った。掘り下げを開始する予定であったが、杭打ち作業が終了せず、発掘機材の搬入を行っただけで、翌日以降に掘り下げを延期する。

22日はI区C7、C8区の杭打ち作業を行った後、掘り下げ調査を開始する。南側は比較的表土層が薄く、20cm程でローム漸移層あるいはローム層に達する。北側は北側の堰に向かって徐々に深くなってしまい、C7a2では70cm程掘り下げてもローム漸移層に至らない。遺物は土器片がそれぞれのグリッドから1~2点の出土をみただけである。

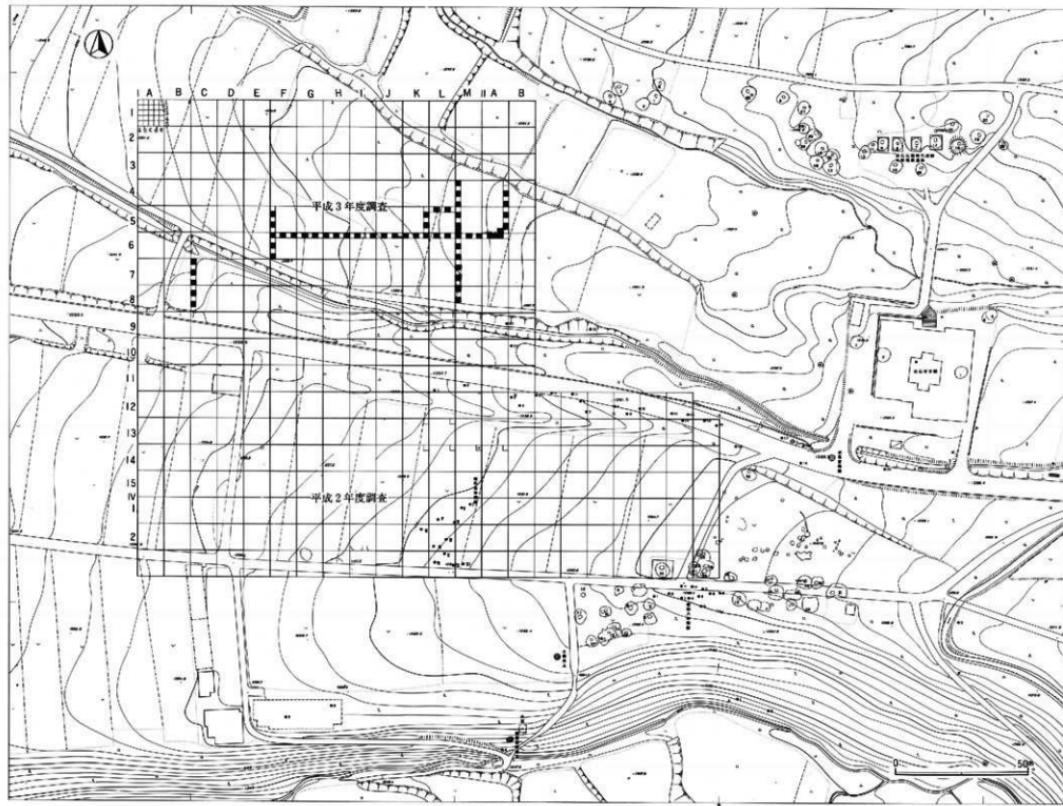
26日は前週に引き続きI区C-aラインの掘り下げを行う。また、堰の北側の杭打ち作業を行い、I区F-aラインの各調査区の掘り下げを行う。こちらは南側にある堰に向かって傾斜している。午後からI区6-1ラインの各調査区の掘り下げを開始する。

27日は引き続き調査区の掘り下げを行う。I区F5a4で中央やや南と北西隅の2カ所でピット状の落込みを検出する。I区M6a1は地表から約20cm掘り下げた黒褐色土内から土器片が約10点ほどまとまって出土している。ローム漸移層まではまだかなりあると思われるが、遺物の出土状態から住居址の検出される可能性が高い。

28日は前日に引き続き、掘り下げ調査を継続する。I区M6a1は昨日に引き続き掘り下げるが、住居址の中央に当たった可能性が強く、全面から七器片、黒曜石片の出土がある。そのため、当初の計画になかったが、住居址のプランを検出するためI区M5a5を掘り下げるとしている。調査区南側から土器片、黒曜石片の出土はみられるものの、プランの検出には至らず、明日以降の調査に期待する。

30日は前日に引き続き、掘り下げ調査を継続する。I区M5a5は南側2/3が落込んでおり造構の可能性が強いが、はっきりしたプランがつかめていない。午後2時半頃から雨が降り始めた為、調査を中止し、整理作業を行う。

9月2日はI区M-aライン南側の掘り下げを先週より継続して行う。堰に向かって傾斜しており、最も南側のI区M8a3はローム漸移層まで約60cmを測る。明日以降造構の検出の為の精査を行う予定。I区6-1ラインの掘り下げも継続して行う。I区M6e1は北側中央と南西隅に、径約50cmほどの落込みが検出された。遺物は土器片が10点余り出土している。II区A6d1は地表から約30cmで土器が集中して出土し始める。住居址になるとと思われるが、プランの検出までには至らなかった。II区A6d1で住居址が確認される見込となつたため、尖石遺跡の北端の住居址であることを確認するため、II区A-eラインに新たに調査区を設定する。設定した調査区はII区A5e4、A5e2、A4e5、A4e3の4つの調査区である。I区M5a4はローム漸移層にかかる層を約5cmほど掘り下げ、住居址のプラン検出を試みたが、I区M5a5・M6a1で確認された造構はM5a4まではいっておらず、M5a5北側で立ち上がりがあると思われ、プランははっきりとは確認できなかった。また、このM5a5、M6a1で検出できそう



第1図 滝路グリッド図 (1/1,500)

な住居址が、尖石遺跡の北西端であることを確認するため、I区L-1ラインにL5b1、L5d1の2ヵ所、K-eラインにK5e4、K5e2の2ヵ所の計4ヵ所の調査区を新たに設定し、掘り下げに入る。その結果、遺構は検出されず、遺物もごくわずかであった。

3日は前日に引き続き、掘り下げ調査を継続する。II区A5d1で住居址と考えられる遺構が検出されたため、住居址プラン確認のため、II区A6c1を新たに掘り下げるとした。住居址プランはちょうどII区A6c1とII区A5d1の境界で検出された。II区A6d1は昨日より土器が集中していたが、西側中央と南東隅の2つに大きく別れる。II区A5d1で住居址と考えられる遺構が検出されたため、住居址プラン確認のため、II区A5d5を新たに掘り下げるとした。南東隅に住居址プランが掛ることが確認された。また、調査区の掘り下げと並行してC-aライン、6-1ラインの土層断面図を作成する。土層断面図は地形をある程度把握できるよう、X軸は1/40、Y軸は1/20で作成した。C-aラインは7と8、6-1ラインはF~Kまでに終了する。

4日はI区6-1ラインをL-M-II区Aまでの土層断面図作成を継続して行う。他にI区M-aライン・II区A-dラインの土層断面図の作成を行う。I区F5a4の土坑、M6e1の土坑、II区A6a4の住居址の遺構検出状態の平面図を作成する。I区C-aラインから埋め戻し作業に入る。

5日はI区M5a5の住居址の遺構検出状態の平面図を作成する。また、M5a5の住居址の土層断面図を作成する。埋め戻し作業を継続して行う。

6日は埋め戻し作業を継続して行う。作業終了後、機材の撤去を行い、すべての調査を終了する。

### 第III章 遺跡の層序

昨年度の調査において、尖石遺跡の基本層序が述べられているので、それをもとに述べる。

尖石遺跡の層序は、第1層の耕作土である黒色土以下、第2層が漆黒土、第3層が黒褐色土、第4層がローム漸移層である黄褐色土となっている。

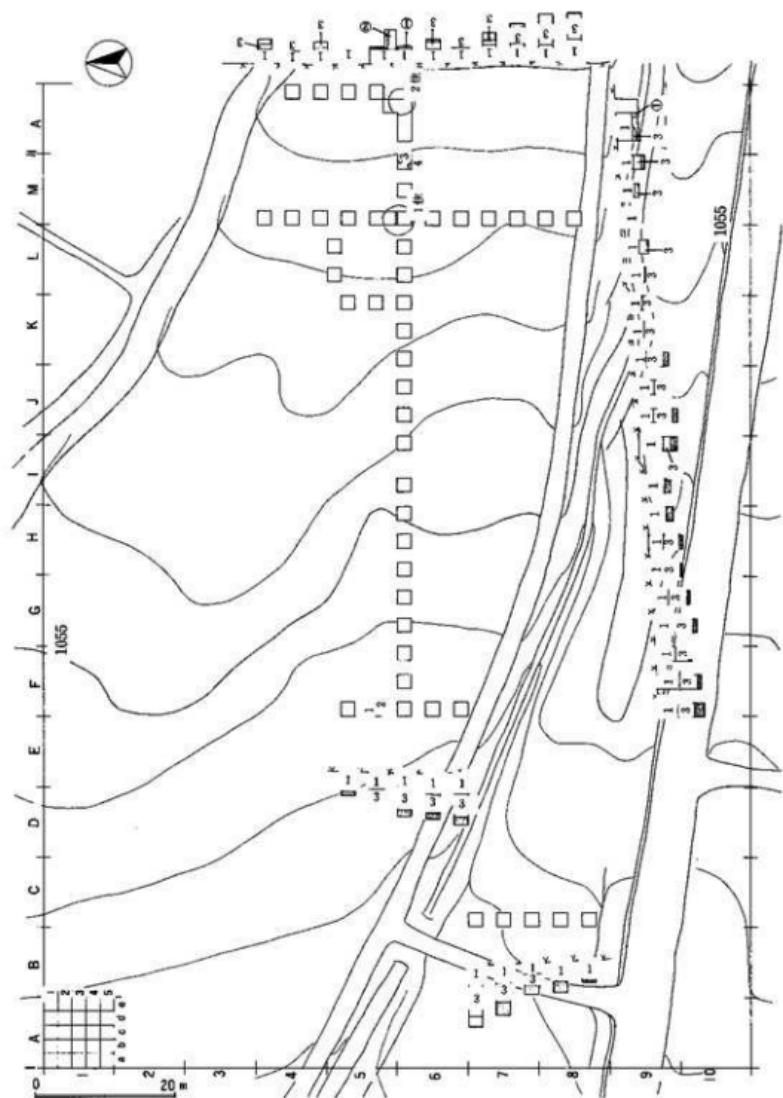
今回の調査においては、第2層の漆黒土が検出できた調査区ではなく、すべての調査区で耕作土の下は直ちに黒褐色土となり、以下ローム漸移層と統一している。

#### 1層 黒色土（耕作土）

地表面下10cmほどまでは粒子は粗く、徐々に粒子が細かくなる。締りは全体になく、粘性もない。1mm以下のローム粒子を稀に含み、ロームブロックの混入はない。3mm程度の炭化物・礫を稀に含む。

#### 3層 黒褐色土（遺物包含層）

粒子は細かく、締りはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を稀に含むが、ロームブロ



第2図 遺構の分布（1/800）と遺跡の層序（1/80）

ック・炭化物・礫は見られない。

#### 4層 黄褐色土～暗褐色土（ローム漸移層）

粒子は細かく、締りはあるが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含み、3mmほどのロームブロックも少量含む。稀に3mm大の炭化物粒子を含むが、礫の混入はない。

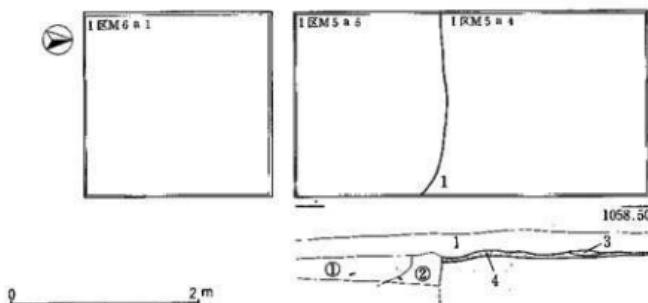
## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

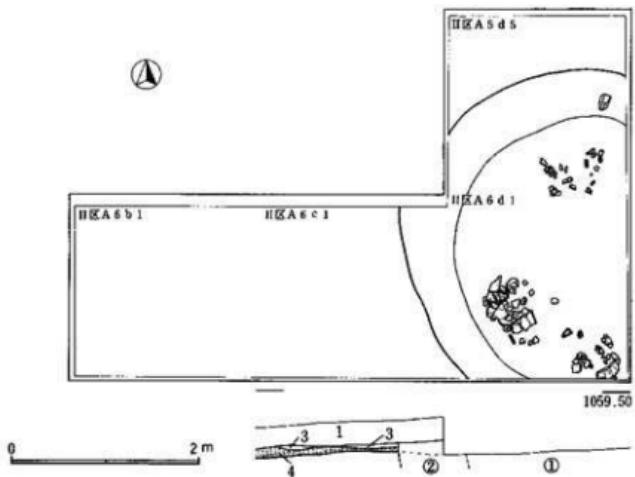
#### (I) 住居址

##### 住居址1（第3図、図版1-2）

I区M6a1・M5a5で検出された。I区M6a1を掘り下げて行く過程で、遺物の出土が多く、遺構の存在が予想されたが、調査区内には遺構の落込みは検出されなかった。また、I区M5a4でも遺物の出土は見られるものの、全面がローム漸移層となり、やはり遺構の落込みは見られなかった。そこで、I区M5a5を新たに掘り下げたところ、I区M5a4との境界付近で、落込みが確認された。遺構は土層断面図から、尖石の標準土層の3層面を掘り込んでいることが観察される。遺構内の覆土も現状では2層に分層することが可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、締りもあり、粘性もある。ローム粒子は1mm以下で、少量含まれ、ロームブロックは3mmほどで稀である。炭化物の混入は見られるものの少量である。土器片・黒曜石片・打製石斧など、遺物の出土が多量に見られた。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、締りはあるが、粘性はない。1mm大のローム粒子を多量に含むが、ロームブロックは4mm大のものが稀に入る程度である。また、4mm大の炭化物を稀に含む。遺物の出土はあるものの、1層ほどではない。



第3図 住居址1 (1/60)



第4図 住居址2 (1/60)

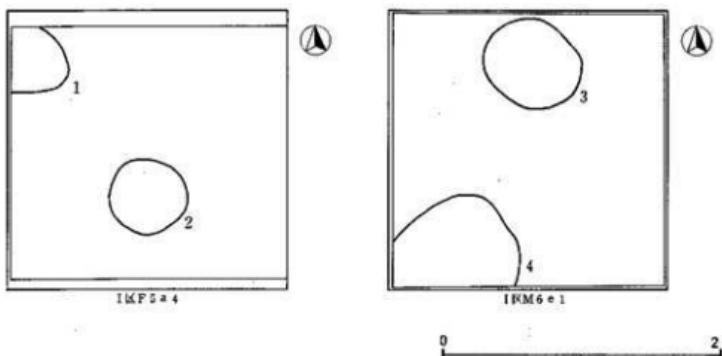
#### 住居址2 (第4図、図版2)

II区A 6 c 1・A 5 d 5・A 6 d 1で検出された。II区A 6 d 1の掘り下げにおいて、縄文土器が一括して出土し、住居址である可能性が強まったが、II区A 6 b 1では住居址の落込みが検出されていないため、II区A 6 c 1・A 5 d 5の2つの調査区を新たに掘り下げ、遺構の平面プランを確認することとした。遺構は土層断面図から、尖石の標準土層の3層面を掘り込んでいることが観察される。覆土は1層が黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。3mmほどのローム粒子・炭化物を含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく縮っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を多量に含む。検出された覆土を平面で観察すると、リング状となっており、遺物の多く出土している層は上層である1層で、下層にあたる2層からは遺物は出土していない。このことから、住居址が廃棄され、ある程度埋没した段階で遺物が捨てられる、所謂吹上パターンを呈していると考えられる。

#### 土坑

##### 土坑1 (第5図、図版3-1)

I区F 5 a 4に位置する。調査区の北西隅にあり、平面形の全体を知ることは出来ないが、径50cmほどの土坑になるものと考えられる。覆土は暗褐色土を呈し、粒子は細かく、よく縮っており、粘性はない。ローム粒子の混入が多い他、にごったロームが斑状に入っている。



第5図 土坑 (1/40)

#### 土坑2（第5図、図版3-1）

I区F5 a 4に位置する。平面形態は径56cmの円形を呈している。掘り下げを行っていないので、底面および断面の形状は不明である。覆土は黒褐色土を呈し、粒子は細かく、よく縮っており、粘性はない。にごったロームが斑状に入る。また、炭化物粒子が混入する。

#### 土坑3（第5図、図版3-2）

I区M6 e 1に位置する。平面形は長径72cm、短径59cmの楕円形を呈している。掘り下げを行っていないので、底面および断面の形状は不明である。覆土は黒褐色土で、粒子は細かく、よく縮っており、粘性はない。ローム粒子・ロームブロックを含み、やや明るい感じがする。また、炭化物粒子が混入する。

#### 土坑4（第5図、図版3-2）

I区M6 e 1に位置する。調査区の南西隅にあり、平面形の全体を知ることは出来ないが、上記3遺構よりも大きくなると考えられる。覆土は暗褐色土で、ローム粒子が上記3遺構に比して大きいため、明るい感じがする。全体に粒子は細かく、よく縮っているが、粘性に乏しい。

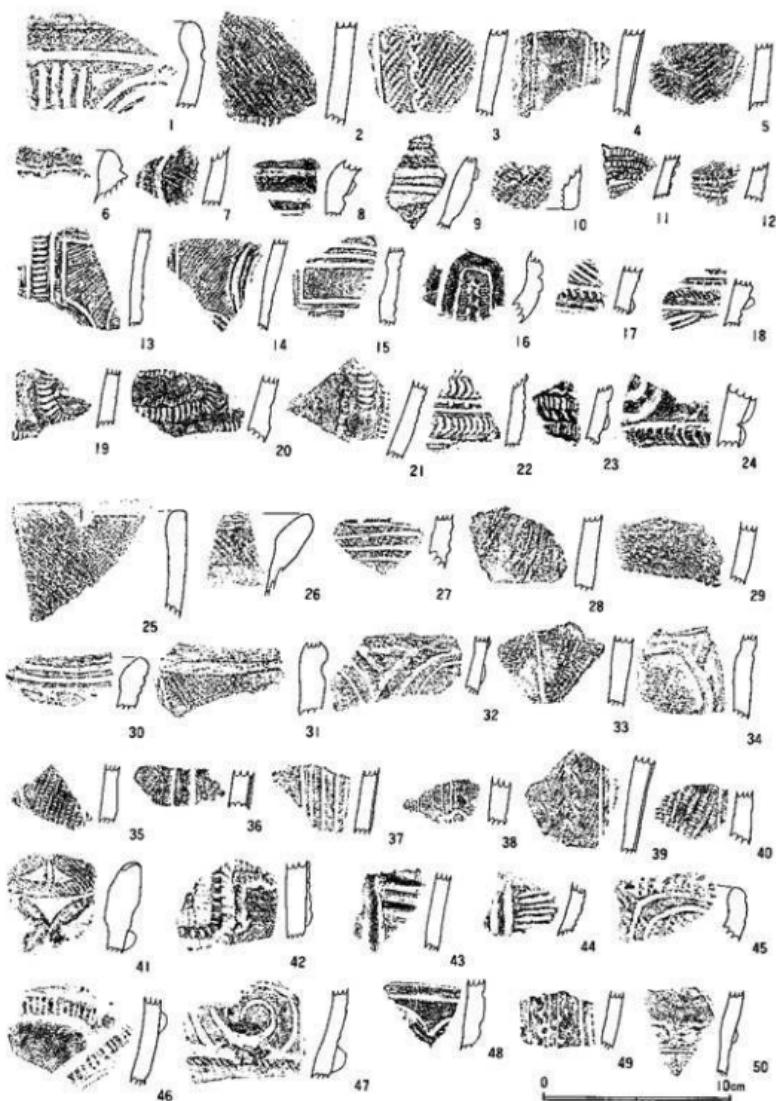
## 第2節 遺 物

### (I) 土 器

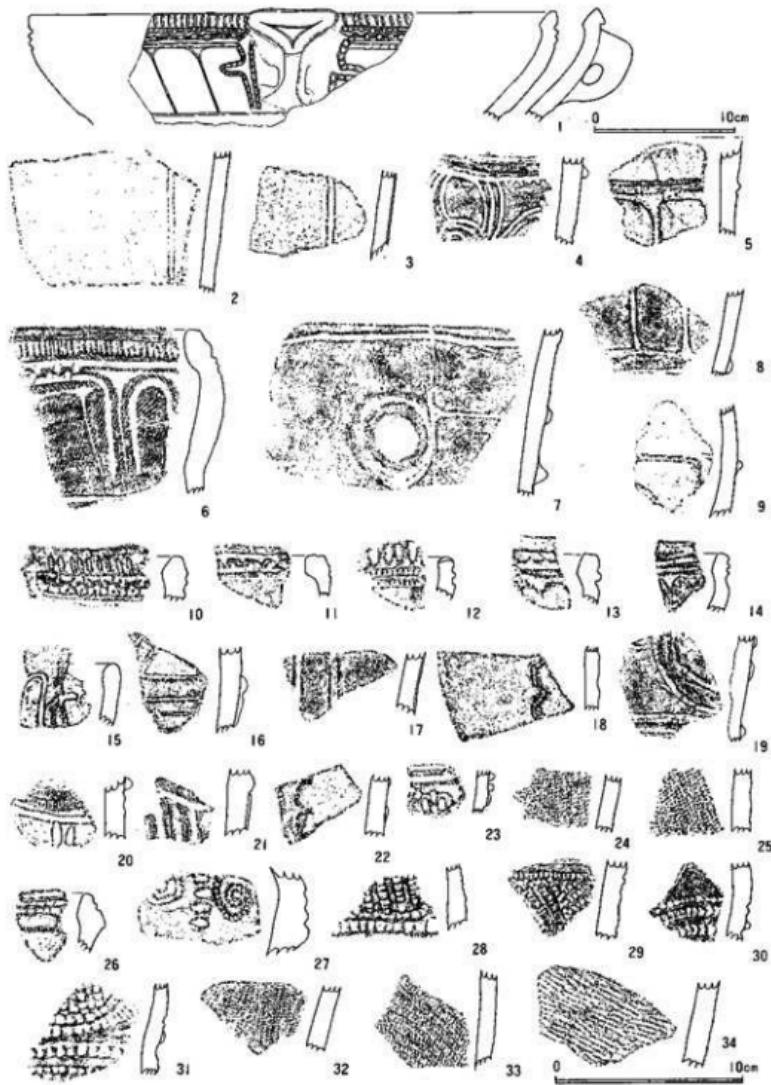
#### 住居址1周辺の土器（第6図）

第6図1~24は、住居址1を検出したM5 a 5、M6 a 1両グリッド出土の土器である。遺構を検出した段階で掘り下げを中止しているため、上層の表土層である1層と住居址上層の遺物が含まれていると思われる。

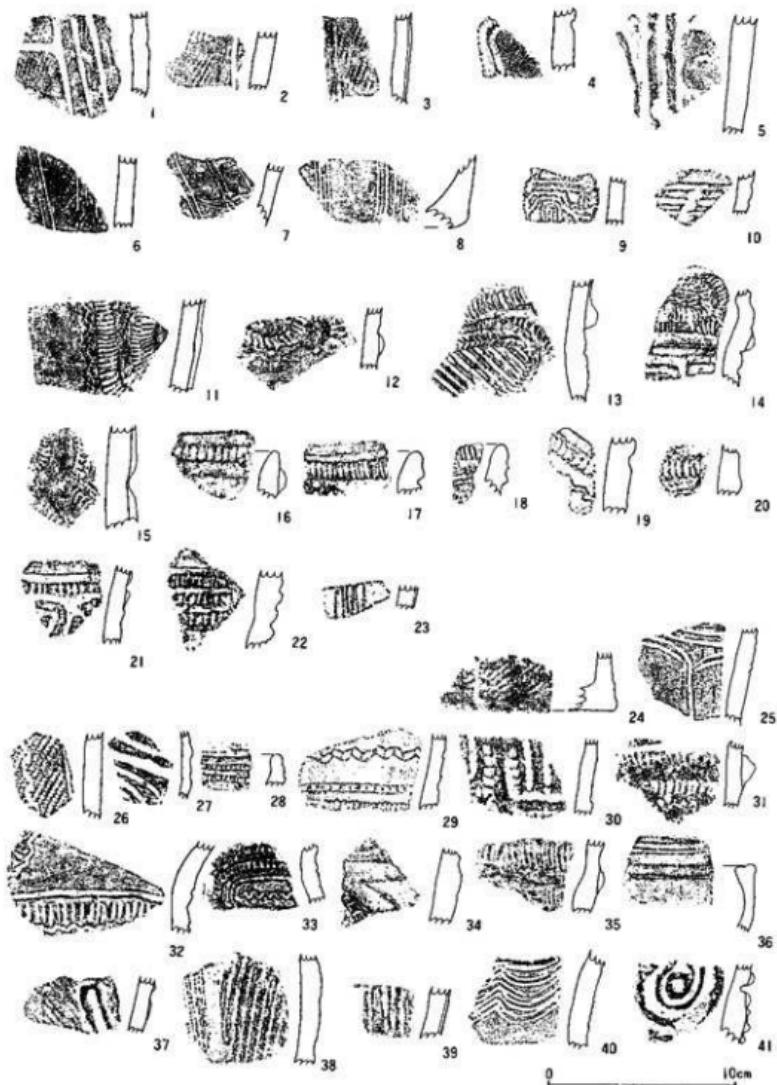
遺物は猪沢~藤内式期までのものである。



第6図 縄文時代の上器(1) (1/3)



第7図 繩文時代の土器(2) (1/3, 1は1/4)



第8図 繩文時代の土器(3) (1/3)

第6図25~50は、M5a4出土の土器である。M5a4は、住居址1の検出されたM5a5に隣接しているが、遺構の掘り込みは本グリッドまで至っていない。しかし、本グリッド出土の土器は、住居址1と極めて似通っているものが多く、出土量も他のグリッドに比して多い。遺構外ではあるが、合せて掲載した。

遺物は猪沢~藤内式期までのものである。

#### 住居址2周辺の土器（第7図、第8図1~23）

住居址2を検出したII区A5d5、A6d1は表土の掘り下げ段階から多くの遺物を出土しており、遺構のプランを検出できた段階で、一括土器が出土した。

遺物は九兵衛尾根~藤内式期までのものがあるが、一括土器として出土しているのは九兵衛尾根期のものである。この土器は取上げられてしまったものを除いて、そのまま埋め戻してある。

#### 遺構外出土の土器（第8図24~41）

遺構の検出されなかったグリッドからは、前述のM5a4を除いて、それほど多くの土器は出土していない。特に住居址1が検出されたM5a5、M6a1より西側では、最も多いグリッドでも5点ほどで、まったく出土しなかったところも多い。土器の内容については前述の住居址と大差なく、中期の初頭から中葉にかけてが主で、中期の後半に属すると考えられるものは、ほとんど見られなかった。

#### 石器（第9図）

本遺跡からは打製石斧、磨製石斧、横刃形石器、石鎌、大形粗製石匙、石鎌、黒曜石剝片、黒曜石原石、ビエス・エスキュー、軽石、剥片が出土している。

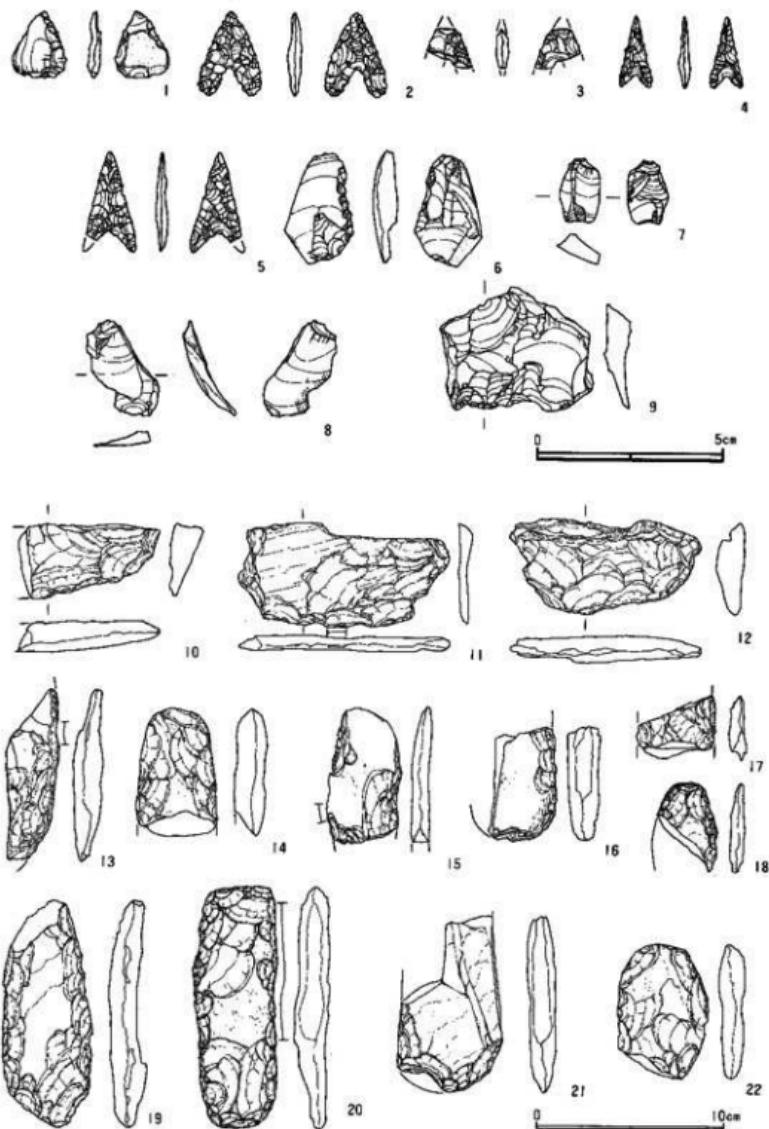
石鎌は5点が出土している。1・2はII区A6d1、3はII区A5d5の出土で、住居址2の検出されたグリッドからの出土である。4はI区M5a2出土、I区5はM5a4出土である。

ビエス・エスキューは8点が出土している。図示した7と8の2点は共にII区A6d1の出土である。

6と9は調整のある剥片で、共にII区A6d1の出土である。

横刃形石器は4点が出土している。図示したのは3点で、10がI区K6c1、11がII区A6c1、12がII区A5d4からの出土である。

打製石斧は17点が出土している。図示したのは10点で、13がI区M6a5、14がI区A6d1、15がI区K6a1、16・18~20がI区M5a4、17がI区A6d1、21・22がI区M6e1の出土である。



第9図 繩文時代の石器（1～9は2/3, 10～22は1/3）

## 第V章 調査の成果

今回調査した尖石遺跡の北西地区は、かつて調査が行われていない地区であり、遺構の分布状況がまったく推測できない地区であった。今回、北西区の調査を行うについては、遺構の分布状況を見るこの他に、遺跡の北西端を明らかにすることを目的とした。また、この地区は、遺構の時期を把握し、その成果にそって尖石遺跡全体の各時期の集落構造を見る上にも、重要な地区と考えられた。

調査したグリッドは計53の小グリッドであった。各小グリッドは4m<sup>2</sup>のため、延べ212m<sup>2</sup>と、予定の120m<sup>2</sup>を大きく上回る面積の調査を行った。

調査の結果、住居址が2軒、他に土坑が4基発見できた。発見された住居址は少なかったものの、尖石遺跡の北西区にも住居址が少なからず存在し、台地のほぼ全面を集落として利用したことを、ほぼ明らかに出来たと思われる。

今回調査した尖石遺跡の北西区で出土した土器は、2軒の住居址と周辺を含めたほとんどが中期の初頭から中葉にかけての時期のもので、南東区に分布が多い中期後半の曾利式土器はほとんど出土していない。このことから中期の初頭から中葉にかけて、遺跡の全体に大きな集落をつくっていたものが、後半に入ると既に調査が行われている南東区に集落の中心が移り、北西区は集落から外れることになる状況が明かとなった。

また、遺物の出土状態から、今回発見された2軒の住居址が尖石遺跡の北西隅にあたるのではないかと考えられる。この北西区から隣接する与助尾根遺跡までは、谷を隔てて指呼の距離にあり、時期的にも同時期と考えられることから、從来言われてきた尖石遺跡を親村とし、与助尾根遺跡や与助尾根南遺跡を子村とする尖石遺跡群全体が、縄文時代中期を考える上で、改めて重要なってきた。

現在、尖石遺跡の北西区と与助尾根遺跡との間の谷は、水田として利用されているが、縄文時代の谷部の利用を考える上で、また、史跡公園として整備する景観の上でも、公有地化の必要性を強く考えさせられた。

尖石遺跡出土遺物数量表

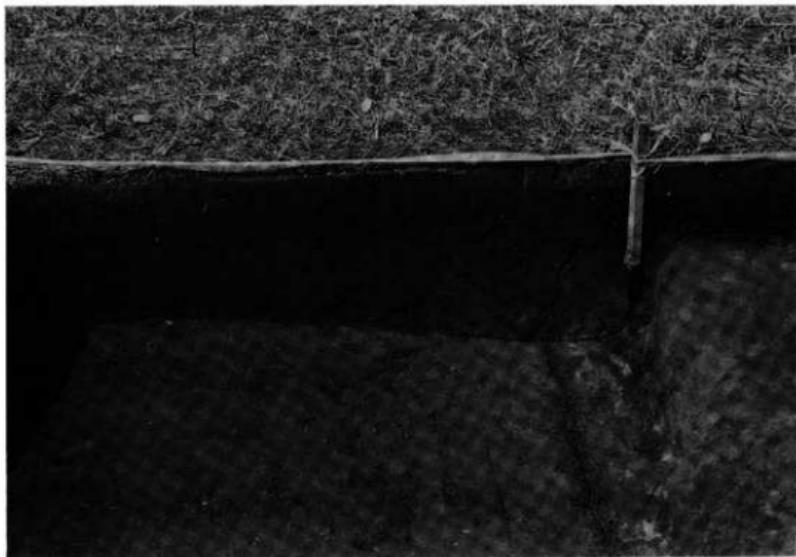
区 道	調査区、 構	土器	打斧	横刃	素斧	石鏟	凹石	剥片	石礫	石錐	銅片 (OB)	大型 粗製 石器	ピニス ・エヌ ・カーブ	原石 (OB)	軽石	その 他
I	C 7 a 1	4	1													
I	C 7 a 3	1														
I	C 7 a 5	1														
I	C 8 a 2	2														
I	C 8 a 4															
I	F 5 a 2										1					
I	F 5 a 4	1														
I	F 6 a 1															
I	F 6 a 3															
I	F 6 a 5															
I	F 6 c 1															
I	F 6 e 1	2														
I	G 6 b 1	2														
I	G 6 d 1															
I	H 6 a 1															
I	H 6 c 1															
I	H 6 e 1															
I	I 6 b 1															
I	I 6 e 1															
I	J 6 b 1	1														
I	J 6 d 1															
I	K 5 e 2	1														
I	K 5 e 4	2														
I	K 6 a 1	1	1													
I	K 6 c 1	5		1												
I	K 6 e 1															
I	L 5 b 1															
I	L 5 d 1	2														
I	L 6 b 1	2														
I	L 6 d 1	1														
I	M 4 a 1	3														
I	M 4 a 3	2														
I	M 4 a 5	5														
I	M 5 a 2	2														
I	M 5 a 4	162	4	1					3	1		42				
I	M 5 a 5	110							2			19				
I	住居址1															
I	M 6 a 1	96									1	53				
I	住居址1															
I	M 6 a 3	38										14	2			
I	M 6 a 5	28	2									7	1			
I	M 6 c 1	12			1				1			7	1			
I	M 6 e 1	35	2									6				
I	M 7 a 2	19										4				
I	M 7 a 4	45	3									14	1			
I	M 8 a 1	12										1				
I	M 8 a 3	41										4				
I	A 4 e 3	4										1				
I	A 4 e 5	2	1									1				
I	A 5 d 5	51		1					1			1	2			
I	住居址2															
I	A 5 e 2	5							2			2				
I	A 5 e 4	13							1			5		1	1	
I	A 6 b 1	17										5				
I	A 6 c 1	4		1								6				
I	A 6 d 1	322	4	1					6	2		74	2			
I	住居址2															
	合計	1055	18	4	2				15	5	1	273	1	8	3	1

土器は8点が  
接合

# 図 版



1. 発掘グリッド



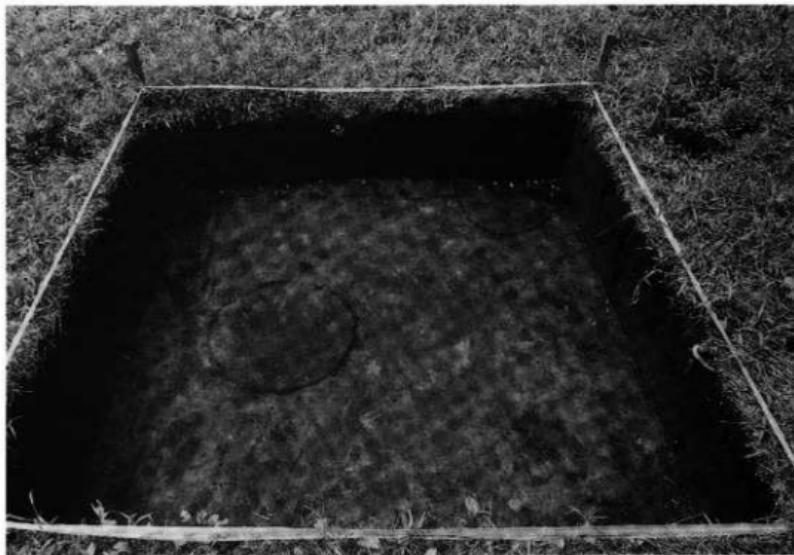
2. 住居址 1



1. 住居址 2



3. 住居址 2 遺物出土状態



1. 土坑 1 · 2



2. 土坑 3 · 4

---

## 尖石遺跡

保存整備事業に係る  
試掘調査報告書

---

平成4年3月20日 印刷  
平成4年3月25日 発行

発行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号

茅野市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---

